様式(細則5-2)

令和6年7月9日

浜田市議会議長　様

議員名　笹田　卓

調査研究活動報告書

下記のとおり調査研究のため視察を行ったので報告します。

記

1．視察先
(1) 福山市立常石ともに学園 / 福山市教育委員会　(広島県福山市)
(2) 修徳館 / 株式会社まちと学びのイノベーション研究所　(岡山県真庭市)
(3) 真庭あぐりガーデン / 十字屋グループ・NPO真庭あぐりガーデンプロジェクト　(岡山県真庭市)

2．視察事項
(1) 教育魅力化に関する施策の検討にあたり、イエナプラン教育の実践状況を学ぶ
(2) スマートシティに関する施策の検討にあたり、IT・クリエイティブ分野の進出企業支援や地域DX人材の育成活動等の状況を学ぶ
(3) 市民の憩いの場のあり方の検討にあたり、場所のコンセプトや運営方法を学ぶ

3．視察の目的（市政との関連など）
(1) イエナプラン教育について知識を深めるとともに、その方針導入に至った教育委員会の考え方や運営状況を調査する。
(2) デジタル技術を活用した地域づくり（スマートシティ）の考え方、及びデジタル田園都市国家構想関連事業の成果を調査する。
(3) 駅周辺エリア並びに道の駅再生に当たって、賑わい創出や場づくりの考え方を調査する。

4．期間（移動日を含む）　令和6年7月3日（水）～ 7月4日（木）

5．経費　19,423円　(経費内訳　・視察費 1,665円　・旅費 17,758円)

6．視察のポイント・議員活動や市政への反映など
(1) 今度は浜田市のフリースクールの状況を見ながら、導入の可能性を探っていく。
(2) 浜田市でもスーパーアプリ導入に向けて働きかけていく。
(3) 駅前の周辺の賑わいづくりには民間の力が不可欠。浜田市に民間との連携強化を強く促す。

7．視察内容（詳細は別紙のとおり）

浜田市議会 受付 6.7.9

【調査研究活動の概要】

1.　福山市立常石ともに学園

＜概要＞

・公立初のイエナプラン教育校。
・2016 年に福山 100NEN 教育がスタート。異年齢教育など取り組んでいたことがイエナプラン教育と合致したことが背景にある。
・イエナプランの特徴：異年齢集団でのグループ編成、対話、遊び、仕事、催しに基づいた時間割　→　ともに学園ではその要素を取り入れて学校づくりをしている。
・統廃合の際に、閉校になるはずだったところを地元企業が出資。

＜ポイント＞

・教科等の学習にはない学習の広がりがある。
・あそびそのものが学び　＝　探求する力や協働する力を育む。
・催し：卒業生がボランティアに参加。
・常石ともに学園サポーター：ボランティア制（学習、安全の環境サポート、サポーター同士の繋がり促進など）。
・コミュニティスクール制度を導入。
・異学年が一緒にいるメリットを出すような授業。学年別に取り出しての学習もある。学習素材は 3 年分。理解まで求めなくても触れていく、逆に学び直しもできる。
・教室は、設計会社がオランダへ行って教育現場を研究している。こども目線。
・校区はない。
・学期ごとに用意された業者のテストが合わない。単元テストはしている。学んだ内容で先生がテストを作っている。
・子供たちの成果をポートフォリオにして三者懇談を実施。懇談の前に先生と子供で話してから、保護者に自分で伝えるようにしている。子供からできていない、わかっていないということを聞けることが大事。
・年度途中は受け入れていない。オープンスクールは毎年 10 月。年々募集が増えている。市内の児童優先。
・イエナプランを取り入れたことで対話の時間が増えている。先生の教材研究の時間も増えている。こどもたちはなんのためにこれをやるのかがわかっていないと理由を聞いてくる。わかっていれば聞いてこない。子供の変化の一つだ。
・1 年間かけて学ぶテーマを設定（マイプロジェクト）。聞く側がおもしろいと思ってもらえるテーマを設定するよう考える。テーマをみんなで共有してブラッシュアップ。
・イエナプランは理念。手法ではない。教科・学年を超えた授業。市全体で取り組むテーマとして「こども主体の学び」を掲げている。市内の先生の意識もかわってきた。

・高学年がやっていることのチカラを使って授業をしている。市内の先生が研修しにきている。県から 4 人の加配がある。

（所感）

3 学年ごとの異年齢グループでブロックアワーと言う授業をされているところを参観させていただいたが、各々が真剣に取り組んでいたように感じた。

市外からの児童も多く、今後の中学進学に関しての課題はこれからだと言っておられたが、少なくとも地元の児童は進学先も同じような作りの学校があり落ち着いて通っているとのこと。小学校だけでなく、中学との連携も密にしていく必要があると感じた。

当市でも様々な問題を抱えた児童が多くなり、イエナプラン教育を浜田市で取り入れる価値は十分にあると感じた。

選択制を導入し、浜田市というより石見全体で取り組んでいく考えも出来るのではないかと強く感じた。

対話を促進することを目的に設計。

フリーアドレスの職員室。

(2)修徳館 / 株式会社まちと学びのイノベーション研究所

＜概要＞

・デジタルによるイノベーション創出がミッション。
・データサイエンスの研究者が研究員として多く参加。
・地域におけるシンク的な役割を担っている。
・修徳館はデジ田交付金を活用して改修し同社が運営管理。
・県外からの IT・クリエイティブ分野の進出企業や地域企業との連携を支援。

＜ポイント＞

・まにこいん（デジタル地域通貨）＋スーパーアプリ化の事業を申請中。
・アプリを通じた新しい市民ネットワークがポイント。
・市民サービスが一つのアプリでできるようになる

・OS を使い分けて、各地域では小さなものを導入していく方向へ。
・クラウドファンディング機能や地域活動に対する「いいね」機能も付加できる。
・地域で推進していくには、協議会的な組織をまずつくることが大事。
・行政では各部局ごとにアプリの導入などを行なっていたが、一緒にやっていく組織を再編していく流れが必要。
・おもしろいアプリを作った人にはまにこいんをプレゼントするような地域イベントも有効（住民参加型のまちづくり）。
・地域通貨はチャージができるポイントのようなもの。経済効果があるという文脈で導入される地域が多かったが、使ってもらうためのコストがかなりかかる、利用者数のスケールが必要という課題がある。一方、コミュニティを作っていくという面で見れば大きなメリットがある。
・新しいプラットフォームを作ると既存アプリは統合していくことに。最適化を。
・まにこいんは、利用した店舗はわかるが、利用用途はわからない。バルチケットや、スタンプラリーなどには有効。法人間での支払いが促進されれば地域通貨は回り始めるのでは。現金への換金もできればいいが費用もかかる。
・まにこいんの利用者に、高齢者は少ない。市役所の中に相談窓口も設置。スマホ以外のやり方も検討中。
・民間がプラットフォームを活用できるようになるといい。協議会による運営が将来像。
・修徳館 1 階は高校生の学習スペースとしても利用されている。
・修徳館 2 階はシェアオフィスとして 4 事業者が入居。E スポーツ関連企業も入居して、今後 E スポーツ関連の事業も展開予定。

キッチンスペースが併設されている。

1 F のオープンスペース。

（所感）

地域通貨導入が目的ではなく、それを元に市民サービス向上と連携させるスーパーアプリの導入は当市にも必要だと感じた。

地元経済はもちろんのこと、医療、福祉、 防災、交通、環境など一括して情報共有ができるスーパーアプリを推進していく必要がある。それには人材が必要であり講師の岡野

氏などの協力を得て、人材育成・発掘をお願いする必要がある。さらには地元の経済界との連携も不可欠、当市が中心となり、官民学が一体となり、早急に協議会を立ち上げる必要があると強く感じた。

(3)真庭あぐりガーデン / 十字屋グループ・NPO 真庭あぐりガーデンプロジェクト

＜概要＞

・十字屋グループ：運営会社。創業 108 年。環境衛生事業や福祉事業も運営。お節介を元に様々な事業を展開。
・吉備中央町ではポータルアプリの開発を行い、困りごとを助けるマッチングサービスなども行う。
・ゴミ処理に費用がかかることに着目し、バイオ液肥プラント製造を始める。
・地域一丸となってまちづくりに取り組む必要があるという認識のもと、NPO 真庭あぐりガーデンプロジェクトが発足。真庭あぐりガーデンに入居。
・NPO 真庭あぐりガーデンプロジェクト：十字屋グループではあるが、場所の運営だけでなく、場所と人をつなげる活動を行う。
・真庭あぐりガーデン：利用者は 20 数万人（お客さんや高齢者の方々など全員含む）。利用者は様々。レストラン：80 席。
・農水省の基金を活用してリニューアル。飲食、物販、野菜のカット加工、食肉加工、菓子製造など多機能な施設。
・循環型農業・社会の推進、こどもの探究心の育成、高齢者の元気づくりが事業の柱。

＜ポイント＞

・お節介がなくなることでコミュニティがなくなる。
・生ゴミをゴミステーションにある大きなバケツで回収。
・バイオ液肥を農家の方々へ無償提供。最近は農家も活用し始めた。
・こうした取組に対する理解が深まってきた中で、循環推進のためになかった機能（あぐりガーデン）を作った。
・今後バイオ液肥のプラントができれば、生ゴミが全て肥料になる。濃縮液肥を作ってドローン散布も今後行う。それを使った野菜をあぐりガーデンで販売。
・NPO スタッフは十字屋グループからスタッフ派遣という形で支援。1/3 が委託、1/3 が協賛金・助成金、1/3 が収益活動。
・リニューアルで面積は倍。3500 平米→7000 平米。以前は飲食 3 店舗＋物販のみであったが飲食は集約。子供が遊べるスペース、授乳室、スロープなどに配慮。
・あぐりガーデンは、田舎の人が来るとおしゃれに感じ、都会の人が来ると懐かしく感じるバランスに配慮。
・施設の近くに畑もあって、学校や家庭で体験ができないことを提供している。

・夜は 10 名以上の宴会を受付。80 名収容。総会をしてから懇親会など受けている（月に７～８回）。
・規格外の野菜活用に取り組んでいる。高齢者が通ってカット野菜を製造。シフト表に自身で申告（カット野菜）、40 分作業してお茶をして 20 分休憩その後、40 分作業して帰る。
・各公民館でカットしたものを集約してここで消毒して商品化。
・カット野菜は学校給食でも活用されている。
・生きがい＋生産者にもお金が残るように、持続可能なモデルを作りたい。雇用ではなく有償ボランティア。
・土曜日学習応援団：毎週土曜日に異年齢のコミュニティ作りとして始めた。
・飲食事業だけで黒字は難しいが、必要とされれば活かされるだろうと考えている。数字を目的にはしない。

開放感のある施設。

ガラス張りの加工場。

（所感）

地元の大きな会社が主体となり「お節介なまち」を体現しておられ企業の力が大きいと感じた。

ここを参考に自然循環、高齢者生き甲斐等、当市でも取り組めることがあるのではないだろうか。

また、カット野菜等、食に関することは、地元の地域団体でも取り組めると感じた。自治体だけの力だけではこのような施設は実現不可能だが、三桜酒造跡地には市民が集う憩いの場所になるよう議会としても推進していく必要がある。